

「貧しい人々は幸いである」か

"Blessed Are You Poor." Is It True?

橋本 滋男

Shigeo Hashimoto

キーワード

貧しい人々、幸い、ルカ福音書 6.20、マタイ福音書 5.3、富、所有

KEY WORDS

the poor, blessed, Lk.6.20, Mt.5.3, wealth, possessions

要旨

イエスは「貧しい人々は幸いである」と言った（ルカ 6.20）。これは祝福の言葉である。しかしそれは我々の通常の価値観を全く転倒させた発言であり、誰しもが直ちに賛同できる思想ではない。この言葉に込められたイエスの真意は何か。ルカ 6.20 とその並行文（マタイ 5.3）を比較すると、マタイの文にはすでに解釈が加えられていることが分かる。そのことは、マタイの文のみでなく、それよりも古いと考えられるルカの文においても解釈が込められていることを推定させる。本論はこうした考察を重ね、貧富についてのイエスの思想と表現の仕方について理解を深める。おそらくイエスは、神への絶対的な信頼に基づいて、所有に依存したりそれへの配慮に支配されることを拒否し、すべてを神にゆだねる生を勧めたのであろう。またそこには彼独自の誇張表現が作用していたと思われる。

SUMMARY

Jesus said "Blessed are you poor, for yours is the Kingdom of God." (Lk.6.20) This is certainly a pronouncement of his blessing, but it is a radical reverse from our ordinary understanding of value, because we usually think "wealth gives us happiness." How can we understand this saying of Jesus and what did he really mean by it? Through a comparison of Lk.6.20 and its parallel passage in Mt.5.3 we find the latter contains additional words which show some

interpretation added by evangelist Matthew or by the early church. This suggests that such interpretation by the church permeated also in the Lukan passage. By such analysis of Synoptic traditions this paper attempts to clarify Jesus' thoughts on poverty and wealth and how he expressed his unique understandings. Jesus, standing on the absolute confidence in God, refused a life depending on possessions, and stressed to entrust all to God. It is also possible to point out that there is hyperbole in his sayings concerning poverty and wealth.

問題提起

「貧しい人々は幸いである」(ルカ 6.20)というイエスの祝福の言葉は、我々の通常の価値観をまったく転倒させるものであり、我々を大いに困惑させる。富が必ずしも幸せを保証するとは限らず、まして人生の諸問題のすべてを解決するのではないことは生活経験的に認めざるを得ないところである。しかし貧困の克服はいずれの時代にも人々の真剣な願いであり、ユダヤ教社会でも初期キリスト教会においても貧者への施しは隣人愛の実践として促されてきたのであった。¹ 上記のイエスの言葉には、その時代の人々の真面目な営みや目標にあえて挑戦するという響きを感じ取ることもできるが、しかし現代においてこれをそのままに受け取ることはきわめて難しい。² 一体この発言に込めたイエスの真意は何であろうか。これを記録した福音書記者ルカや、それを修正した文形(「心の貧しい人々」)で記載したマタイの理解では、どうであったのであろうか。

「貧しい人々は幸いである」という言葉に対する批判は、様々な角度から提示され得る。この言葉が、貧しさの状況と原因を放置し、その具体的な解決を考えないままに、貧しさが直ちに幸いであると主張しているのであれば、第一にそれは社会的強者が宗教によって弱者をおとしめるための論理となると言えよう(たとえばK.マルクス)。第二には、それは弱者の側からのルサンチマン的なすりかえとなるという批判(たとえばF.ニーチェ)があり得よう。いずれの場合も、強者ないし富者は依然として富裕の中で満ち足りた生活を続け得るのであり、それを是認するような発言に対して厳しい宗教批判を招くことはあらためて言うまでもない。あるいは第三に、この言葉は「隣人を愛する」というイエスの教えとどう調和するのかという神学的な問題も提示されよう。実際に具体的な場面で貧窮に苦しむ人に向けてこの言葉を語り、それだけで終わるなら、それは貧しい人を一層困らせ、あるいは侮辱することになろう。つまり何らかの解釈を付加しなければ、これは貧しい人に向けてとても口にできる言葉ではない。

確かにイエスは「貧しい人々は幸いである」と告げたあと、「神の国はあなたがたのものであるから(ὅτι)」と言葉を続け(ルカ 6.20 c) 貧者が幸いである理由を述べてはいるが、

しかしこの理由句は、第一にあまりに簡単であって、現実の貧困の問題に対してどのような解決が与えられるのか、明らかではない。第二にイエスの語る「神の国」はしばしばたとえ話で述べられているので、「神の国」が具体的にどのような事態であるのか必ずしも明確でない。それは個人の精神的な平安という内的状態なのか、社会的広がりをもつ歴史現象として生起するのか、19世紀以来の「神の国」をめぐる提起された諸説と解釈史を考えるだけでもイエスの理由句がこの文脈ではあまり積極的な意味を持ち得ないという印象を受ける。

ルカの文形での「貧しい人々は幸いである」には繫辞 (copula) がないので (マタイ 5.3 でも) 「幸いである」と現在での宣言と読むべきか、「幸いとなるであろう」という未来的な約束と読むべきか明らかでないことも、この句の理解を困難にしている。理由句の方では「あなたがたのものである (ἐστίν)」と現在形が用いられているので、それに先行する祝福の言葉も現在的に理解すべきだと考えられるが³、そうであっても、なぜ貧しい人が現状で幸いなのか、なお明確ではない。その上、ルカ自身は期待される「神の国」の到来が実際には予想に反して遅延していることを認め、イエスがたとえ話を語る動機として「人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである」(19.11)という編集句を付加して説明しているのであるから、6.20で「幸い」の理由としている「神の国はあなたがたのもの」という宣言も、ルカの流れから見ると、いわば「絵に描いた餅」になってしまうと言えるのである (ルカ 17.20 も参照)⁴。

ところでルカ 6.20 (さらに 6.20 - 23) とマタイ 5.3 (および 5.3 - 12) には著しい共通性が認められるので、ルカとマタイは、これらの箇所においてQを資料として利用したと考えられる。これら二者の比較を通して、「心の貧しい人々」というマタイの文形にはマタイの個人的な解釈が付加されていると一般に理解されているが、それでは、より単純で直截なルカの文形は、マタイよりも古い伝承層を反映しているとしても、イエスの言葉をそのままに伝えているのだろうか。これらの問題をめぐって以下に論じてみたい。

ルカ 6.20 とマタイ 5.3 の比較

考察の対象となるイエスの言葉は次の通りである。

ルカ 6.20

貧しい人々は幸いである、
神の国はあなたがたのものである。

Μακάριοι οἱ πτωχοί,

ὅτι ὑμετέρεα ἐστὶν ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ.

マタイ 5.3

心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。

Μακάριοι οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι,

ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

これらを検討するに先立ち、ルカとマタイでのそれぞれの文脈を比較する必要がある。

1. ルカでは4回に及ぶ「幸い」(20 - 23節)の宣言に続いて、富者への「不幸」が4回告げられ(24 - 26節) これらに対比的構造になっている。この「不幸」*οὐαί* は強度の叱責、あるいは裁き、嘆きを表わす言葉であり、ルカにおいて「平地の説教」以外では他に10回用いられている。⁵ これらの箇所では *οὐαί* は、女性への同情をこめた21.23を除き、⁶ キリスト教の宣教を受け入れない町への呪詛(Q、10.13//マタイ11.21)であり、あるいは11.42 - 52(6回)のように独善的で頑迷なファリサイ派と律法学者への非難を並べた文脈に用いられている。こうした威嚇の響きをもつ「不幸だ」を述べる6.24 - 26を「幸い」のあとに配置するのは、ルカの文章構成によると思われる。⁷ 他方、マタイ5章には「不幸」の宣言がない。

2. ルカ6.20においてイエスは「弟子たちを見て」祝福を語りはじめる。これに続く祝福の言葉は2人称複数「あなたたち」であるので、ルカの場面描写ではこれを聞く弟子たちが直接に「幸い」を告げられることになる。ところが後半の24節以下の2人称複数に向っての「不幸」の宣言には、それを直接に受ける聴衆が挙げられていない。6.17に「おびたしい民衆」が弟子たちと一緒にいたとなっているので、この民衆が「不幸」の宣言の受け手であったと解されるかもしれないが、17節は明らかにルカによる場面設定の編集文であることを考えると、「不幸」の受け手はイエスが語った元来の説教においては存在せず、ルカの想定する場面で(記述の段階において)初めて登場すると考えられる。つまり「幸い」と「不幸」という組み合わせはルカが構成したのであって、これがイエスの最初の状況を反映しているか、疑わしい。マタイ5.3以下に「不幸」の宣言がないことも、ルカの文には彼の編集的創意が反映していることを思わせる。そしてそのことは、「幸い」3項と「不幸」3項の組み合わせのみでなく、ここで問題としている6.20にもルカの編集が加わっている可能性を示す。

さらにこれと付随して、ルカ6.23の、弟子たちを迫害する「この人々」(*οὗτων*、直訳では「彼らの」)とは誰を指すのか、この文脈からははっきりしない(26節でも)こともここで指摘しておく。

3. マタイ5.11 - 12での「幸い」は、それ以前の3人称での「幸い」とは違って、2人称で告げられる。この部分はルカ6.22 - 23に相当する箇所であり、2人称という点ではルカの文体と一致する。これら並行する2箇所を検討すると、「幸い」の事態として「ののしられ」「迫害され」「悪口を浴びせられ」ることが想定されており、さらにこのような迫害の生じる原因としてマタイでは「わたしのため」と記し、ルカは「人の子のため」とされている。イエスが原因となって迫害が生じたり「人の子」をイエスと同定するのは、イエスの生前においてすでに起ったというより初期キリスト教における経験や教会のキリスト論を表わすと考えるのが妥当であろう。とすれば、

マタイ 5.11 - 12 // ルカ 6.22 - 23 はイエスの史的な発言というより迫害に苦しむ教会の中で発せられた励ましがいエスの言葉として加えられたと考えるべきであろう。この場合「預言者たち」とは旧約聖書に登場する人物に限定されるのではなく、初期教会の宣教を担った人々をも指すのであり、伝道のゆえに苦難を受けるキリスト教預言者を引き合いに出していることになる（マタイ 23.34 // ルカ 11.49 参照）。ここにはルカとマタイでの共通度が高いので、Q に由来すると想定し得るが、Q においてすでに教会の状況を反映した言葉が形成されていたのである。⁸

4. ルカでは「幸い」を告げられるのは一貫して2人称「あなたがた」であり、⁹ 従ってイエスは目の前にいる人を相手にして語りかけることになる。¹⁰ 他方マタイでは、3 - 10 節の8項目において「幸い」は3人称（「その人たち」）であり、一般的な言述となっている。¹¹ つまりイエスから「幸い」な人と言われるのは、その現場にいる人々ではない。こうしてマタイではイエスの発言に生々しい具体性が希薄化し、イエスとそれを聞く人々との間の緊張感は薄れて、祝福の言葉は一般的な命題となるという印象を与える。このようなルカとのずれは、マタイにおいてイエスの言葉が観念化していることと関係があると思われる。この視点でルカとマタイの祝福の言葉を比較すると、ルカ 6.20b - 21 の3項目の「幸い」はいずれもマタイの対応句において観念化されている。すなわちルカの「貧しい人々」はマタイで「心の貧しい人々」であり、同様に「飢えている人々」は「義に飢え渴く人々」、「泣いている人々」は「悲しむ人々」とあり、マタイにおいて具体性を捨象して精神化、内面化していることが分かる。こうした操作はマタイに由来すると判断されている。

5. ルカ 6.20b とマタイ 5.3 では「貧しい」 $\pi\tau\omega\chi\acute{o}\varsigma$ という形容詞が共通している。従ってこの語はQ に由来すると考えてよい。ギリシア語で「貧しい」を意味する語はこの他にも $\pi\acute{\epsilon}\nu\eta\varsigma$ 、 $\pi\epsilon\nu\iota\chi\rho\acute{o}\varsigma$ 、 $\acute{\epsilon}\nu\delta\epsilon\acute{\eta}\varsigma$ 、があり、¹² それらの間の意味の相違は文脈に応じて必ずしも明確ではないが、¹³ これらの語の中でも $\pi\tau\omega\chi\acute{o}\varsigma$ は極度の貧しさを意味する。この形容詞の動詞形 $\pi\tau\omega\chi\epsilon\acute{\upsilon}\omega$ 「貧しくなる」は、コリント 8.9 にイエスについて述べる1例のみが見られるが、それよりも意味上重要なのは「ちぢこまる」「うずくまる」を意味する動詞 $\pi\tau\acute{o}\varsigma\sigma\omega$ で、それとの関連で考えると、 $\pi\tau\omega\chi\acute{o}\varsigma$ は物乞いをせざるを得ない者、無一物の者、他者からの援助を頼りにせざるを得ない者、を表わす。この語は遡ってこれに対応するヘブライ語 $\text{‘}an\acute{\imath}$ 、 $\text{‘}anaw\acute{\imath}m$ においても同様に、貧しい人、窮地にある者、神に頼らざるを得ない者、を意味する（詩編 14.6、22.24、25.16、34.6、40.17、69.29 など）。¹⁴

ルカとマタイはともにこの $\pi\tau\omega\chi\acute{o}\varsigma$ を用いており、ルカは伝承のより古い文形を示すと言える。ルカのイエスは他に修飾する語を並記せず、端的に幸いな人の有り様として「貧しさ」を述べる。それは何よりも経済的な貧しさを表わすのであり、これに続く

21 節の「飢えている人」「今泣いている人」が現に困窮の極みに陥り、貧困のただ中にいる人を指していることから明らかである。ルカにおけるこの理解は、祝福の後の「不幸」の宣言において(24 - 25 節)「富んでいる人」「満腹している人」「笑っている人」と対比されていることから明らかである。すなわちルカにおける *πτωχός* は何よりも経済的な貧しさである。これに対してマタイでは、貧しさに「心の」*τῷ πνεύματι* を付加し、「貧しさ」を精神化、宗教化している。¹⁵ こうしてマタイにおける「心の貧しい人々」とは、神の前で貧しい人、自らに頼るのでなくへりくだって神にのみ頼る人、を意味する。¹⁶ 「心の」の付加による意味の一方への引き寄せはマタイの解釈から生じたものである。しかし以上の比較から、ルカはイエスの主張を忠実に表現し、他方マタイはイエスの意図したところから逸脱してしまったと簡単に判断できるかどうかは、なお議論の余地がある。

なぜ貧しい人が幸いなのか

「貧しい人々は幸いである」とは通常の価値観からは到底受け入れることのできない主張である。イエスはどのような意図でこの言葉を口にしたのであろうか。この問題をめぐって提起された説を以下に取り上げ、それぞれについて検討してみる。

1. イエスの思想にはしばしば逆転の発想がみられるので、「貧しい人々は幸い」もこれと軌を一にした言葉だと解する説。たとえばマルコ 10.31「先にいる多くの者があとになり、後にいる多くの者が先になる」、マタイ 10.39「自分の命を得ようとする者はそれを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得る」などが思い起こされる。ところでこれらの箇所に示される逆転の思想には、現在は後方の遅れた場所であって抑圧されているが、いずれは先頭に立つ、という時間線が想定されている。この考え方を「貧しい人々は幸い」に適用する場合、現在は貧しくて不幸であるがいずれ豊かになる、という解釈に立って逆転を想定することになるだろうが、これは文脈からして正当な解釈であろうか。上述のように「貧しい人々は幸い」の句には繫辞がないため、「幸い」は未来の約束とも解されるが、しかしこれに続く理由句「神の国はあなたがたのもの」は現在時制 *ἐστίν* であるので、「幸い」の告知にも幸いなのは未来での予想でなく現在の事態として認識すべきだという主張が込められていると解釈すべきであろう。そうであれば、ここには時間線上での逆転はなく、現在の事実としての貧しさがすでに実は「幸い」なのだと言われているのである。また、いずれ後で逆転するというのは、後で優位に立ち勝者になることを想定しているのであるから、結局は現在の富者と同じ価値基準に立って勝つことを目指しているのではないか。そ

ここに一種の宗教的ルサンチマンを感じ取ることも可能であろう。

2. 「貧しい人々は幸い」とイエスが述べたとき、ユダヤ教社会の価値観を転倒させ、富めるエリート階層への批判を込めた、とする説。当時のファリサイ派や律法学者の一般的な救済観では、律法を守る者が終末において優先的に神の国に入ることを許されるのであり、貧しい「地の民」は閉め出される。このような考え方が貧者にも当然のこととして受け取られている状況において、イエスの発言は貧者にとって思いもかけない喜びであった、という説である。¹⁷ その場合、富の与え得る「幸せ」を相対化し、一方で貧のもたらす苦しみを相対化したと見ることになる。イエスの言う「幸い」は未来に実現される約束として期待されるのではなく、貧の現実がそのまま肯定され祝福されるという。貧しさの責任は当人にあるとして責めるのではなく、貧しい人が貧しいままで受け入れられるという。しかしこの理解では貧の具体的解決は二の次になり、結局は富者の現状が維持されていくことになるのではないか。従って、富の価値について再検討され、その意味が低減されるとしても、貧をそのまま肯定することは、一方で富のもつ問題性を追及することにはつながらないおそれがある。

3. 語りかけるイエス自身が貧しい放浪の生活の中にいて喜びの訪れを伝えるのであるから、「貧しい人は幸い」の言葉は貧者にとって慰めとなる、という説。イエスは「枕するところもない」(Q、マタイ 8.20//ルカ 9.58) 生を送り、進んで貧者の苦しみと悲しみを知りつつ、かえって自由に喜びをもって生きた。そのイエスの言葉であるゆえに、これで温かさや力が与えられたはずだ、というのである。¹⁸ この場合、ルカにおいて祝福の言葉が2人称「あなたがた」で告げられていることに注目したい。イエスが貧しい人との連帯あるいは生活共感をもつのであれば、なぜイエスはここで自らをも含めて1人称複数「わたしたち」と言わなかったのであろうか。これはイエスとその言葉を聞く者との関係を考える上で意外に重要な問題である。¹⁹ さらに言葉の内容はさておき、発言者がイエスであれば受け入れられるというのは、そこにすでにイエスを救済者とする立場を持ち込んでいるのであり、イエスの言葉を最初に聞いた貧しい人の反応(おそらくは反発や批判)を後代の信仰者の立場から無視することにはならないだろうか。さらに貧しい姿のイエスが貧しい人に向かって「幸い」を語ったとしても、それは悪く言えば共倒れの痛み分けのようなものであり、貧の具体的積極的な解決は放棄されている。

4. ルカ 6.20 での貧しい者への祝福は、編集史的視点に立って、4.16 - 19のナザレでの伝道と関連して理解すべきであるという説。マルコ福音書では、イエスが故郷ナザレに帰って村人に宣教する物語は彼の公活動が始まってからかなり経過しての出来事であって(マルコ 6.1 - 6)、イエスの多くの働きの一つに過ぎないが、ルカではこれを公活動の最初に移している。この位置づけは明らかにルカの編集的意図による。

しかもそこでイエスはイザヤ書 61.1 を引用して、自らの活動が「貧しい人に福音を告げ知らせるため」(4.18)であることを宣言するのであり、これが伏線となって 6.20 での「祝福」の言葉となる。さらにこの 2 箇所を結ぶ編集的な系は、7.22 での、洗礼者ヨハネの質問に対するイエスの返答、「貧しい人は福音を告げ知らされる」につながる。従って 6.20 はイザヤ書の救済の預言が今やイエスの言葉と行為において実現されたというルカの神学を強く示す役割を担っている、というわけである。こうした福音書全体の構成的な枠組みから 6.20 を見ると、6.20 はイエスよりもルカのキリスト論的な解釈を表わす言葉と解され、「貧しい者」も具体的社会的なあり方というより、福音の受け手としての神学的理念の中に位置づけられた存在となる。²⁰ ここで「貧しい人々」とはイエスの弟子たち(すなわちルカの教会)を意味することになり、彼らが祝福あるいは「神の国」の受け手として救済の歴史に登場することになる。²¹ この解釈に立てば、ルカの言う「貧しい人々」とはイエスの目の前にいる存在ではないことになる。

以上の説を検討した結果、いずれも満足できるものではないと思われる。経済的な貧を宗教的理想とし、これをあえて求める生き方が実際にあったことは歴史的に認められるが、しかしイエスの思想を追究するため、さらに福音書の他の箇所の検討が必要であろう。

イエスの教える生き方

以上に見たところでは、「貧しい人々は幸いである」あるいは「心の貧しい人々は幸いである」というイエスの極端な言葉を理解する上で、この言葉にのみ関心を集中させてはふさわしい解決が難しい。むしろイエスの思想の全体から考え直す必要があろう。そこでこの言葉との関連で、イエスの教えの特色を次のようにまとめることができよう。

1. イエスは貧富の問題の具体的な解決は考えていない。

(1) マルコ 12.13 - 17 (// マタイ 22.15 - 22、ルカ 20.20 - 26) では、皇帝への納税の是非を問うファリサイ派たちの質問に対して、イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」と答える。このペリコーペにおいて、ファリサイ派とヘロデ派が連携して登場し、イエスに尋ねるといふ書き出しの場面設定は、おそらくマルコによる編集文であろう。²² 偶像礼拝を権力の基盤とするローマ皇帝がユダヤ教徒を支配しているという現実、ユダヤ教徒にとって屈辱的であり、宗教的にも反発すべき事態であったが、それだけでなく、ローマから課せられる税は経済的な苦しみであった。フ

アリサイ派の質問は、重税に苦しめられる貧しい民衆の切実な気持ちを背景にしており、それだけにイエスを政治的に落し込めるための巧妙な罠であった。これに対してイエスは質問者たちや民衆の予想もしなかった答でこの場を巧みに切り抜ける。17節の「皇帝のもの」(τὰ Καίσαρος)とは皇帝への税に他ならず、その関連において「神のもの」は神殿税を意味し得る。つまりイエスは皇帝税と神殿税の両方を納入すべきだと答えたことになる。この返答が問い詰められてのとっさの切り返しであったとしても、そこには幾重にも収奪される税のために苦しめられる人々に対する思いは直接的には見られない。²³ 神のものと皇帝のものを区別することによって後者のもつ意味は相対化されるとしても、民衆にはこれら2種類の税を納めることが当然とされており、税の重圧は依然として同じである。²⁴

(2) ルカ 10.25 - 37 の「親切なサマリヤ人」のたとえは、ある律法学者の質問に対して答える中で、イエスが具体的な愛の行為を勧める物語である。このペリコーペでは、場面設定 (25 - 28 節、36 - 37 節) とたとえ (30 - 36 節) の間に以下のような巧みな二重構造があり、さらにたとえの前後は愛の行為を促すほぼ同じ言葉で囲まれている (28 節「実行しなさい」、37 節「同じようにしなさい」)。

	(1)	(2)
1. 律法学者の質問	25 節	29 節
2. イエスの問い	26 節	30 - 36 節
3. 律法学者の答	27 節	37 節 a
4. イエスの命令	28 節	37 節 b

この構造は明らかにルカによる工夫である。こうした編集的操作が施されているので、たとえ自体も細部までイエスの発言を留めているか疑問であるが、ここではこのたとえにそって考えてみたい。²⁵ イエスはこのたとえを通して、目の前にいる傷ついた人に対して、たとえそれが無関係の人、他国人であっても、できるだけ愛を実行せよと教える。このたとえは律法学者が「わたしの隣人とはだれですか」と質問を重ねたために、それに対応してイエスがある事例を想定して論じるのであり、話の展開は2人の対話状況に規定されている。そのためイエスは社会的条件を捨象して論点を個人の行為に集中している。しかしたとえば強盗に襲われて傷ついた人が数多くいれば、そのような人たちはたちまち貧困に陥るであろう、たまたま通りかかった個人の親切で事態の解決は可能であろうか。あるいはなぜ人が強盗を働くのか、不安定な社会的経済的条件や治安問題も無視できないであろう。貧困のゆえに盗賊にならざるを得ない人もいたことを思うと、「親切なサマリヤ人」の行為はもともと緊急時における一時的救助でしかない。そのような問題はこのたとえに絡めては論じる

べきではないかもしれないが、イエスにそのような社会的視点があったとは思えない。

2. 徹底的に神に信頼して生きる。

(1) マタイ 6.25 - 34 (//ルカ 12.22 - 34)。この段落は命や体の維持についてあくせくと思い煩うなという教えで始まり、「明日のことまで思い悩むな」という結論で終わる。ルカとの著しい並行構文から見て、これはQに由来すると考えてよい。もちろんマタイの現行文には記者による加筆がいくつか認められる(たとえば33節)。しかし少なくとも25b - 26節、28 - 32節は多くの釈義家によって最古のテキストとされており、²⁶ これらの節からイエスの思想を取り出すことは十分に可能である。すなわちイエスは生活手段の確保に心を奪われることを戒め、そのような思い悩みを放棄し、無所有のうちにも安心して生きることを教える。その理由としてイエスは、神は人が生きていくに必要なものを提供して下さるのだと述べ、従って与えられるもので安心すればいいと言う。それは神に対するイエスの絶対的な信頼を根底にした発言であり、与えられるもの以上を要求したり明日のことまで心配するのは空の鳥にも劣る愚かな取り越し苦労に過ぎないと教える。イエスによれば、神にとって人は鳥よりも価値あるものであるから、神への信頼さえ失わなければ人は伸びやかでゆったりした生を送ることができるのである。逆に言えば、もし衣食が与えられない事態になれば、もはやそれは人にとって必要でなくなっているのだ、ということになる。命は神から与えられたものであり、その維持もまた神の意志と配慮のうちにあるはずだからである。そのような生き方は神への絶対的な信頼なしには到底不可能である。そしてその時、人は一日分の命を感謝し、いわば手ぶらで喜びつつ生きることができるのである。「主の祈り」において「必要な糧を」求めるのも、²⁷ 神への同じ信頼を根底にしていると言える。²⁸ このような考え方では、貧はもはや人の対策や努力で解決すべき問題としての性格を失う。

(2) マタイ 13.44、45 - 46 (//トマス福音書 76, 109) の、畑に隠されている宝を手に入れるたとえと、高価な真珠を入手する商人のたとえにおいて、共通するモチーフは、宝を入手するために「持ち物をすっかり売り払う」ことである。つまり日常生活に必要な道具類から財産に当たるものまでも手放しても惜しくはないし、手ぶらになるときに初めてもっと貴重なものが得られると教えている。日常生活をつつがなく送るための手段を放棄することを勧めるのであるから、これらのたとえにおいて高価な「宝」の前には貧も富も相対化され、積極的意味をもたない。²⁹

(3) これとの関連においてマタイ 10.8「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」の言葉に触れておく。これは伝道に送り出される弟子たちがイエスから受ける生活上の心得の一つであるが、「ただで受ける」というのはおそらく神から受けるのであり、それがただである以上、ただで与えることが当然の行為とされている。ここに

も神は無償で人に必要なものを提供するという思想が背景になっている（コリント4.7でパウロも同じ思想を語る）

3. 人は自らの力で稼いだもの（あるいは所有）によって生きるのではない。

（1）ルカ18.9 - 14、これはファリサイ派と徴税人の祈りのたとえである。ここに登場するファリサイ派は、神の前で自らの数々の功績を誇る。それは彼が努力して積み重ねたものであり、何ら非難されるべきものでなく、神に対して救済を要求するために必要な宗教的所有として提示し得るものである。その意味で彼は宗教的に富者である。他方、徴税人はうなだれて遠くに立ち、神の前に無所有であることを素直に告白する。この場合、徴税人は経済的に貧者であったわけではない。実際この時代に、ザアカイの例に見られるように、徴税人は多くの庶民よりも裕福であり得たのであり、まして無所有であったのではない。しかしこのたとえにおいて彼のそのような所有は彼の救済に役立たない。そして宗教的な無所有を彼が認めることにおいて、彼の祈りは聞き届けられる。つまり経済的であれ宗教的であれ、人は自らの所有によって救われるのではないのであり、こうして貧も富も決定性を失っている。

（2）マルコ12.41 - 44//ルカ21.1 - 4は、エルサレム神殿の賣銭箱に小銭を献げる貧しいやもめの物語である。当時のやもめにとって生活は困窮そのものであったと推定される。そのような状況にもかかわらず、彼女は僅かな所有（しかしそれは彼女の「生活費全部」であった）を自ら手放し、極貧状態で神への信頼を表明する。明日からの生活がどうなるのかについては彼女は思い悩まないどころか、まさに無頓着であり、文字通りに手ぶらで生きること何の心配もしていない。このような無謀といえる行動をイエスは称賛する。³⁰

この例に見られるように、イエスは所有が人を支えるのではないことを教える。その場合、宗教的な所有も経済的な所有も同様に人を生かす力のないことが示される。前者は絶対的な他力救済の思想につながり、それゆえに罪人もまた救われるのであり、後者の場合は貧しいことがかえって神にのみ寄り頼むべきことを教える道となる。イエスは宗教的な無所有を勧め、その具体的な形態として経済的な無所有を評価し、これら二者を区別しなかったのである。つまり「貧しくても平気」の生活とそれを支える信仰を語り、どのような意味でも手ぶらで生きること教えたのである。

（3）ルカ12.16 - 20の「愚かな金持ち」のたとえも所有についての同様の思想を教えている。このたとえに登場する農場主は最初から金持ち（16節、*πλούσιος*）であり、日々の暮らしには何不自由のない身である。その上、予想以上の大豊作となり、収穫物をしまい込む場所に困るほどになる。これだけの豊かな財産があれば「これから先何年も生きて」行けると計算した夜、彼の命は取り上げられる、というのである。21節の教訓的なまとめはルカの付加であるが（トマス福音書63にはこの適用

句は付せられていない。これを別にして、ここに所有は命そのものを保証しないというイエスの思想は明らかである。

ルカにおける経済的関心

マタイ 5.3 をルカの並行句と比較すると、マタイには「心の」 τῷ πνεύματι が付加されている。これはマタイによる編集的変更と考えられ、少なくともその分、ルカの文言がQを忠実に継承しておりイエス伝承の古い層に遡ると推定される。しかしこのことから、ルカの現行文がそのままイエスの発言であったと即断し得る理由とはならない。なぜなら、ルカ福音書にはその全体にわたって経済的問題に対する関心が他福音書以上に強く、貧富の問題に関して注目すべき傾向が認められるからである。この傾向は貧富の問題に対するルカの神学的価値判断というべきものであり、「貧しい人々は幸い」というルカ 6.20 にもそうした傾向の影響が及んでいる可能性がある。そのいくつかの箇所を検討してみる。

1. 貧しさへの肯定的な評価

(1) ルカ 16.19 - 31。「金持ちとラザロ」のたとえであるが、このたとえにおいて貧乏人ラザロは死後に天の国（「アブラハムのすぐそば」）に迎え入れられる。たとえ自体にはなぜ彼が死後にそのような処遇を受けるのか明示されていないが、他方の金持ちが陰府で苦しめられることと対応しているので、ラザロの新しい運命の理由として彼が地上において貧乏であったことが示唆されていることは間違いない。³¹ 25 節「ラザロは反対に悪いものをもらっていた」はこの推定を支持する。ルカによれば、生前における貧しい苦境の生は死後の救いを保証するのである。こうした貧しさへの積極的評価と貧者への関心は、その外にルカ 14.13 にも見られる。14.13 において宴会を開くときは返礼のできない客を招くべきことを教え、その中に「貧しい人」を挙げている。この箇所はルカの特有箇所であり、ルカがどこからこの伝承を得たか明らかではないが、³² 体の不自由な人々に加えて³³ 「貧しい人」を挙げるのはルカの筆によると考えられる。それは先行する 12 節で「近所の金持ちも」招待してはならないという主張と対応している。

(2) ルカ 14.16 - 24 の「大宴会」のたとえでは、予め招待していた客からすべて断られた結果、主人は急遽「貧しい人」と体の不自由な人たちを招き入れる（21 節）。このたとえにおいて貧しい人が招待される理由は貧しいということ以外には考えられていず、その貧しさが大宴会に参加するという幸運を得る条件である。このような貧者に対する評価はルカの思想を反映している。一方、マタイの並行箇所（22.1 - 10）

では宴席に参加できるのは「見かけた者はだれでも」(9節)であって、貧者への特別な関心はない。また並行するトマス福音書 64 と比較すると、細部では相違が認められるが、物語の展開は大筋においてルカ 14.16 以下と同じである。しかしトマス福音書には貧者を招くモチーフは見られない。

2. 貧しくなることを推奨。

以下の箇所においてルカは所有をあえて手放して貧しくなることを勧めている。

(1) ルカ 12.33 - 34 (Q) は大まかにマタイ 6.1 - 21 と並行する箇所であるが、33 節の「自分の持ち物を売り払って施しなさい」は、マタイにないルカ固有の文であり、ここにルカの思想を読み取ることは不当ではない。もちろんルカはこの文を通して財産への執着を絶つことを求めているが、その結果として貧しくなることについて宗教的な評価を付与しているのである。

(2) イエスの人格や思想に心を打たれてイエスに従うようになった人たちは少なくなかった。その人生の転機において、彼らはそれまでの生活で所有していたもの(家族や職、そこからの収入など)をあえて放棄せざるを得なかったが、これについてルカは、他の福音書記者以上に、弟子となる者の放棄の度合いを強めて記述している。たとえば 5.11 においてペトロとヤコブは「すべてを捨ててイエスに従った」と記されている。並行箇所のマルコ 1.18 では「すぐに網を捨てて従った」とあり(マタイ 4.20 も同様) これらを比較してみるとルカの「すべてを」*πάντα* はルカによる付加であると思われる。ルカはイエスに従う者が貧しくなることを強調するのである。同様の変更はルカ 5.28 の、徴税人レビが弟子となる場面でも見られる。レビはイエスの呼び掛けに応えて「何もかも捨てて立ち上がり」従う者となる。この箇所でも並行のマルコ 2.14 では「彼は立ち上がってイエスに従った」と記されており、ルカの「何もかも」*πάντα* という強調はルカによることが明らかである。³⁴ 19.1 以下のザアカイ物語においてイエスは最後にザアカイに救いを宣言するが、それはザアカイがそれまで蓄えてきた財産を「貧しい人々に(τοῖς πτωχοῖς) 施します」と約束する言葉を聞いてからである。ここにも貧しくなることを積極的に評価するルカの思想が反映されていると見得る。

3. ルカは富の危険性について警告する。

(1) ルカ 12.16 - 21 の「愚かな金持ち」のたとえはすでに取り上げたが、このたとえは富が生を保証せず、期待するような幸せをもたらす力にはならないことを教える。同様の警告は 16.19 以下の「金持ちとラザロ」にも読み取ることができる。なおたとえを語るための場面設定となっているルカ 12.13 - 15 においてルカは、遺産を(おそらく不当にも) 取得できなかった人に対し、同情も加担もしない。

以上に見たように、ルカには経済的な関心が強く、イエスの言葉をその視点から解

釈して編集し直したと思われる箇所がいくつか見出される。そのことから、6.20においてもイエスの宗教的意味合いの強かった言葉を強く経済的な意味に捉えて表現した可能性があると言えるのである。

結論的考察

1. イエスには、社会構造や支配体制のもたらす貧富の問題について、これを社会構造の改革によって解決させるという考え方はない。そのような視点が当時のユダヤ教社会にあったことは、たとえば熱心党の存在からもうかがえるが、イエスはそうした改革には関心を示さず、彼の意図するところではなかった。そのような視点や手段に基づいて富者の保有する富を貧者に移すことは考えなかったのである。

なおイエスの弟子の中に「熱心党のシモン」という人物がいるが（マルコ 3.18//マタイ 10.4、ルカ 6.15）、その前歴やイエス運動に参加した後の行動については不明である。シモンがイエスとの共同生活をしながらなお熱心党员としての活動を続けたとは考え難い。イエスの弟子の中にはもと徴税人もいたことを考えると、社会的政治的な立場の全く異なる者たちがイエスの弟子グループに共存していたのであり、彼らはイエスに触れることによってかつての生活態度や価値観、交友関係を大幅に改めたと思われる。

2. イエスは貧しさを恐れるところが全くなかった。それは神への徹底的な信頼に基づいて無所有の生を十分に喜ぶという生き方であり、まさに「子供のよう」な無邪気さで（マルコ 10.15//）明日のことを思い悩まず（マタイ 6.34）「手ぶら」の一日を過ごしたのである。自らの所有や稼ぎに依存することをきっぱりと断念した生であり、神とともにいる以上、もはや貧しくても平気という生である。それは宗教的に転化すれば自力救済の努力やその成果を誇ることを根底から放棄した生き方であり、義人ではなく罪人こそが救われるという彼の告知に通底する。

しかしイエスはこの思想の宗教的な側面と経済的な側面を区別することはなかった。従って経済的に豊かでありつつ、自覚的に宗教的に神の前に無所有である可能性とかその逆とかは、考えられていない。

3. 彼が弟子たちとともに無所有の生を送ったのは、そのような生活において神との関係がより鮮明になるという思いがあったためであろう。パンの必要性がいかに切実であっても、物への思いを断ち切るときに初めて人生の根底にあるものが浮かび上がる。荒野の誘惑物語に見られる「人はパンだけで生きるものではない」（Q、ルカ 4.4//）という言葉は申命記 8.3 からの引用であってイエスが初めて発した言葉ではなく、誘惑物語の史実性もきわめて疑わしいが、しかしイエスの思想をよく表わしてい

ると言える。ヨブの事例に見られるように、豊かさにおいて神の恵みを受け取るのではなく、無所有の中で神と向かい合う道である。

4. イエスが貧しさを肯定する言葉を述べたとき、そこにはイエス特有の誇張表現が作用していた可能性を考えることもできよう。彼の言葉づかいにはしばしば強い誇張が見られるのであり、その例としてマタイ 7.3 - 5//「目の中の丸太」、5.39//「右の頬を打つ者に左の頬を向ける」、6.29//「ソロモンの栄華は花一つに及ばない」、ルカ 18.25//「らくだが針の穴を通る」など、いくつも挙げるのが容易にできる。³⁵ このような表現は、彼が好んでたとえや比喩を多用したという表現法とも関連しており、これによって聞く者に強い印象を与えたのである。従って「貧しい人々は幸いである」というときに、とくに極度の貧しさを表わす *πτωχός* を用いたとき、そこに誇張的な表現があったと推定することは不可能ではない。

5. そうであったとすれば、それが強烈な印象を与えたために、伝承の伝達においてイエスの意図をそのままに伝えることが却って妨げられた可能性も考えられる。そのためルカはこの言葉を経済的な意味に偏らせたが、他方マタイは宗教的な意味に引き寄せて解釈したのであり、マタイがイエスの言葉を曲解したとは言えない。あるいはマタイは「ただ神に寄り頼む人」を意味する文言によってイエスの意図を言い当て、³⁶ 同時に逆方向への誤解をふせいだと言えよう。

注

- 1 ユダヤ教においても貧者への施しは隣人愛の実践として重視され、奨励されていた。義人シメオン(前2 - 3世紀)は「世界は律法、礼拝、慈善の三つによって維持される」と教えたが、この慈善とはレビ記 19.18「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」に基づく。ラビたちの貧者への施しや配慮の教えは、イザヤ 58.7,10、詩編 37.21,41.2、箴言 14.20-21,31などに立脚し、繰り返し教えている。George F. Moore, *Judaism*, 1962, vol. , p.84; , pp.162-179. 初期キリスト教における例として、ヤコブ 2.6-8では貧者を公平に遇し、積極的に施すべきことを勧める。パウロでは コリント 9.9-11を参照。
- 2 現代の国際関係においても貧困をどう解決するかは大きな問題である。2000年の沖縄サミットでアフリカ諸国をはじめとする重債務国の貧困問題が取り上げられたが、2001年4月30日、国際通貨基金(IMF)と世界銀行の合同会議は41カ国の重債務貧困国のうち22カ国の債務530億ドル(約6兆3600億円)を約3分の1に削減することを目標とする声明を発表した。なお日本はこの22カ国に対する債務38億ドルを全額放棄することを表明している(朝日新聞、2001年5月1日)。
- 3 この文脈の現在形について、アラム語に遡って考えると未来的意味を持ち得るという解釈も可能であ

- る。I. Howard Marshall, *The Gospel of Luke; The New International Greek Testament Commentary*, 1978, p.250. なお塚本虎二訳 (1963)「天の国はその人たちのものとなるのだから」も参照される。
- 4 ルカにおける終末遅延の問題は、それ自身がルカ神学の一つの特徴となっている。彼は終末と神の国が到来するまでの「教会の時」が長引くことを予想し、それに基づいて伝承の編集作業をなした。H. Conzelmann (田川建三訳)『時の中心』、1965.
 - 5 ルカ 10.13 (コラジン、ベトサイダに対して) 11.42 (ファリサイ派に対して) 43 (同) 44 (同) 46 (律法学者に対して) 47 (同) 52 (同) 17.1 (躓きをもたらす者) 21.23 (女性について) 22.22 (ユダについて)
 - 6 21.23 は、エルサレムの滅亡 (後 70 年) での悲劇を予告する段落で「身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ」とあり、元来は終末に向けての警告であった言葉が 70 年以後には事後預言として解釈されたもの。これも教会の経験を踏まえた編集の変更である。
 - 7 J. A. Fitzmeyer, *The Gospel According to Luke (I-IX); The Anchor Bible*, vol.28, 1981, p.627, は、6.24-26 が Q に由来するという H. Frankemölle の説を退け、これはルカの文であると判断している。
 - 8 こうした考察に基づき、ルカ 6.22-23 のみでなく、すでに 20 節 b の「貧しい者」も記者ルカの伝承解釈においてはイエスの弟子たちとしてのルカ教会を意味していた、という説も可能である。そうであれば、イエスの真意はともあれ、ルカにおいて教会が理念的に神の前に「貧しい者」と位置づけられていたのである。I. H. Marshall, op.cit., p.246.
 - 9 2 人称で「幸い」を告げる文体は旧約の詩編や知恵文学に多くみられる。申命記 33.29、イザヤ 32.20、詩編 128.1-2、など。
 - 10 ルカは一般に直接的な語りかけの文体を好むことをここで指摘しておくべきであろう。従ってルカの 2 人称がすべての箇所で伝承史的にマタイの 3 人称よりも古いとは必ずしも言えない。H. J. Cadbury, *The Style and Literary Method of Luke*, 1920, pp.124-126.
 - 11 このような人称の変化は、たとえばイエスの受洗における天からの声にも見られる。ルカでは、マルコ (1.11) にならって、天の声は 2 人称で「あなたはわたしの愛する子」(3.22) と呼びかけるが、マタイでは 3 人称で「これはわたしの愛する子」(3.17) という宣言である。
 - 12 πένις は新約中 1 箇所、コリント 9.9 で詩編 112.9 からの引用句に用いられている。これは貧しいがしかし全くの無一物ではなく、自らの働きで何とか稼げる状態での貧困を表わす。善野碩之助、『貧しい者は幸いか?!』、2001、43 ページ。πενιχρός もルカ 21.2 に新約中 1 例のみであるが、70 人訳との関連で見ると、経済的な貧しさに加えて弱者のイメージをもつ語である (出エジプト 22.24、箴言 28.15、29.7)。ἐνδεής も新約中 1 回のみで、使徒 4.34 でエルサレム教会には「一人も貧しい者がいなかった」と述べる文中にある。これは救いの年にはイスラエルには「貧しい者はなくなる」(申命記 15.4) という約束の実現としてルカが用いた語であろう。
 - 13 貧しいやもめが所持金のすべてを献げる物語において、マルコ 12.42 は πτωχός、並行のルカ 21.2 は πενιχρός を用いている (マタイには並行記事がない)。
 - 14 Bammel, πτωχός, *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, Bd.VI, S.885-915; bes. S.903ff.

- 15 「心の貧しい人々」という語の組み合わせはクムラン文書にも見られる。1QH14.3「憐れみと心の貧しい者」、1QM14.7「また心の貧しい者たちによって…悪しき者はみな滅ぼされ」。ユダヤ教的教養をもつマタイにとってはなじみのある表現であったと思われる。荒井献、『問いかけるイエス』、1994、43ページ；H. Balz & G. Schneider（荒井献、他訳）『新約聖書釈義事典』、第2巻、231ページ。
- 16 新共同訳のマタイ 5.3「心の貧しい人々」という訳はルカ 6.20との整合性を守るための直訳であり、そのためこの熟語が元来もっている日本語での意味を無視している。日本語において「心の貧しい人」とは「心の豊かな人」の反意表現であり、貪欲な人、心の狭い人、他者への思いやりが乏しく、不寛容な人、を意味することはここで論じるまでもない。従って直訳では不適切であるとして、フランスコ会訳「自分の貧しさを知る人」(1966)、塚本訳「神に寄りすがる“貧しい人たち”」(1963)、共同訳「ただ神により頼む人々」(1978)などの訳が出されている。
なお文語訳の「心の貧しき人々」は志賀直哉『暗夜行路』において誤解をもたらししており、この誤解に基づいて主人公の謙作が苦悩を深めるという展開になっている(第二・13、1923年完成)。しかしこの誤解は志賀直哉の責任ではない。
- 17 荒井献、前掲書、もほぼこの説に近い。
- 18 善野碩之助、前掲書、22-23、46ページ。
- 19 たとえばイエスが神について家族的な親しみを込めた「父」(アッパ)の呼称を用いたことはよく指摘されるが、しかしイエスが自らと弟子たち(あるいは広くイエスに従う人たち)を含めて「わたしたちの父」と呼ぶことはない。「わたしたちの父」は主の祈り(マタイ 6.9)に1回のみあり、これは弟子たちが唱える祈りとして教えられているので、イエスがともにそう祈るのではない。なおイエスの発言中、「わたしの父」「あなたの父」「あなたがたの父」という句はマタイに集中しており、マルコには見られない。
- 20 Cf., L. T. Johnson, *The Literary Function of Possessions in Luke-Acts*, 1977, p.132.
- 21 Cf., J. Nolland, *Word Biblical Commentary*, vol.35A, Luke 1-9.20, 1989, p.282.
- 22 ヘロデ派の思想や実態については史的にはよく分かっていないが、ヘロデ王を支持するグループとしては、ヘロデの地位がローマ皇帝の認可に依存する以上、皇帝への納税については同意していたと思われる。一方、ファリサイ派は、これに反対であった。これら二派が首を並べて登場するのは、彼らの質問の意図と一致しており、マルコの編集の構成であろう。
- 23 後6年、ヘロデ大王の息子アルケラオスが失脚し、ユダヤ、サマリヤ、イドマヤは皇帝直轄領となり、総督が徴税責任をもつ制度が導入された(6-41、44-66年)。これは人頭税(tributum capitis)で、おそらく一人年額1ローマデナリであった。Cf., J. E. Stambauch & D. L. Balch, *The New Testament in Its Social Environment*, 1986, p.78; E. M. Smallwood, *The Jews under Roman Rule: From Pompey to Diocletian*, 1976, p.151.
なおアルケラオスの上記の領土での税収は、ヨセフスによれば、年600タラントンであった(『ユダヤ古代誌』17.320、『ユダヤ戦記』2.97では400タラントン)。Tacitus, *Annales*, II 42によれば、後17年、

シリアとユダヤの住民は重税に疲れてその軽減を申し出ている。

- 24 イエス時代の税は、ヘロデ王が徴収する税のほかに神殿税、皇帝税、各種の間接税があり、さらに強制的な労役提供（angaria, マタイ 5.41 参照）があった。権力者たちはこの他に恐喝（ルカ 3.14）、賄賂（使徒 22.28、24.26）で私腹を肥やした。
- 25 このたとえの原形や原意を推定することは容易ではない。そのためにはルカによる二重構造と行為を促す枠組みをはずす必要がある。もともとは、ルカ 7.1 以下のような、異邦人の立派な行為を誉める物語であった可能性もある。拙論「よきサマリヤ人のたとえ研究」『基督教研究』第 40 巻第 2 号、1977 年、46 ページ参照。
- 26 U. Luz（小河陽訳）『EKK 新約聖書註解 I/1、マタイによる福音書（1-7 章）』、1990、522-524 ページ。
- 27 主の祈りにおいてパンについて付せられた「必要な」(ἐπιούσιος マタイ 6.11//ルカ 11.3) の語意について、解釈は必ずしも一定していない。この語は新約文書中ここのみであり、新約外の古代ギリシア語文献にも 1 回しか見られない。一般にはこの語を ἐπι + οὐσία に分解して「生存のために」と解する。
- 28 「主の祈り」のパンの求めにおいて、ルカ 11.3 の「毎日与えてください」に対して、マタイ 6.11 は「今日与えてください」となっている。またその動詞はルカが現在命令形 δίδου で反復を意味し得るが、マタイではアオリスト命令形 δός であって、一回きりの願いである。この相違について多くの釈義家はマタイの文形が伝承の古層を示すと理解している。J. Jeremias, *Abba; Studien zur neutestamentlichen Theologie und Zeitgeschichte*, 1966, S.159.
- 29 これら二つのたとえはマタイ特有であるので、マタイの創作とする説もあり得るが（R. H. Gundry, *Matthew; A Commentary on his Literary and Theological Art*, 1982, pp.275-282）トマス福音書に並行があることを考えると、マタイが彼以前に編纂されていた「たとえ話集」から入手したと見るのが妥当である。Cf., W.D. Davies & D. C. Allison, *The Gospel according to Saint Matthew*, vol. 1, 1988, p.434.
- 30 貧しいやもめの献げる金が神殿の収入となることについて、少なくともここではイエスは批判的に考えていない。レプトンの行き先は問題でなく、最後の金を手放すことが肝要なのである。
- 31 P. F. Esler, *Community and Gospel in Luke-Acts; The Social and Political Motivations of Lucan Theology*, NTS MS57, 1987, p.188.
- 32 ルカ 14.7-11 は招待されたときの座席の順位について述べており、モチーフの点でマタイ 23.6 に共通している。後半の 12 節以下では誰を招くべきかを論じていて、ここにはルカ 14.21 のモチーフが伏線として作用している。
- 33 イエスの到来がとくにこのような人々にとって喜ばしい知らせであったことはルカ 7.22（Q）において定型的な表現となっている。
- 34 ルカ 14.33 でイエスは弟子となるためには「自分の持ち物を一切捨てる」ことが必要条件であることを教えるが、この言葉はルカに特有である。また 18.22 で、イエスに真面目な質問を発する金持ちの議員に対し、イエスは「持っているものをすべて売り払うことを要求する。この「すべて」という厳しい要求は並行のマルコ 10.21 にはない。

- 35 J. Jeremias (角田信三郎訳) 『イエスの宣教 新約聖書神学』、1978、42 ページ以下参照。
- 36 ユダヤ教の伝承においても「貧しい人」は「信仰ふかい人」を意味し得た(ソロモンの詩編 5.2、10.6、15.1、エノク書 94.8、97.8 など)。